爆乳バニー
宇佐美マリア
美艶探偵の怪淫事件簿
小説 山本沙姫
挿絵 こうきくう
立ち読み版

第一話　淫獄のマジックショー　006
第二話　淫縛のシャッターチャンス　060
第三話　船旅は危険な賭け　115
第四話　オークションは混沌への序章　172
最終話　陵辱デスマッチ　228
分岐漫画　爆乳バニー宇佐美マリアBAD END　280

登場人物紹介

Characters

宇佐美マリア

人気オカルト小説家にして、怪奇事件を専門にする敏腕探偵。

道明寺美茶

マリアを一方的にライバル視する、売れっ子ライトノベル作家。

大滝

不可解な事件の調査を、マリアに依頼しているベテラン警部。

漁火空也

アシスタントとして、マリアの事務所で働いている童顔の青年。

痛みと恥ずかしさに耐えながらも、気丈なバニーガールはかろうじて動かせる身体を捩り、カードの攻撃を避けようと抵抗しつつロン毛のイケメンに罵声を浴びせる。
「気が強いのはいいですが、わたしを侮辱するのは許せませんね。ならば……」
怪しく口元を歪めた神山が指をパチンと鳴らすと、天井近くにまでスペードのキングとクラブの5が上がっていく。そこから一気に、胸元めがけて猛スピードで飛んできた。
ザクリッ！
「！」
スーツが大きく切り裂かれ、ニプレスを貼っただけの爆乳が、激しく揺れて飛び出す。
「ひいいんっ！　ん……あ……いっ、いやあぁぁぁぁ――――っ！」
普段はクールで、ガラの悪い悪徳政治家にも怯むことのない気丈な知的美女ではあるものの、根は恥ずかしがり屋で可憐な乙女。
厭らしい視線の集中砲火を柔肌に浴び、顔を真っ赤にして、大きな瞳を潤ませて叫ぶ。
「やはり人間の女の悲鳴は耳に心地いい響きだな」
「うむ、脳内に力の源がどんどん溢れてくる……」
しかし恥辱に混乱していても、常に探究心を絶やさない美貌の科学者の耳は、ざわつく客席から微かに漏れてくる観客たちの奇妙な会話を聞き逃さない。
（こいつら、言っていることがなんかおかしい……）
まるで裸の女を目の前にして興奮している自分自身の状態を、生物学的に分析しているかのよう。

「ほう、これはなかなか素晴らしい膨らみ。先端もさぞかし美しいでしょうねぇ……」
端正な顔を綻ばせ、目尻を下げただらしない表情を浮かべると、シャドー神山は軽く髪が靡くほどのオーバーアクションで左手を振り回す。
ヒュンッ!!　パシィンッ!
「やぁっ、んっ……はぅっ、あっ、あんっ!」
すると、またしても謎の力で彼の意のままに動くカードは、次から次へと縛られたバニーガールに襲いかかる。ロケット型に張り出した爆乳が、代わる代わる飛んできたトランプで立て続けに叩かれた。
「ひぃっ!　あうっ!」
汗で湿った柔肌が打たれるたびに、ビリビリとした痺れと熱さが、皮下の神経を擽るように爆乳の中へ染み込んでいく。
(やだ、わたし……なんだか、変な、気持ち……)
鈍い痛みとともに、敏感な乳輪のまわりに心地いいむず痒さが集まり、小さな肉粒を徐々に固くしこらせはじめた。
ピシィッ!
ペリリリィッ!!
何度も叩かれているうちに、汗で湿ったせいで粘着力の落ちたニプレスが、桜色の乳首が隆起していくのに押されて耐えきれず弾け飛ぶ。
「あ……だっ、だめぇっ!!　見ないでぇっ!!」

いつの日か出会うはずの愛する人に捧げるまで、大切にしていたかった乙女の秘所を晒されて、恥ずかしがり屋のバニーは思わず泣き叫びながら身体を捻りまくってしまう。
激しい動きに釣られ、乳首が口の中へ飛び込みそうな勢いで汗ばむ爆乳が上下に波打つ。
「さて、それではそろそろ本日のメインイベントへと移りましょう」
騒ぎ立てるマリアの様子を気にもせず、神山がサッと片手を上げると、彼女はゆっくりと床上二十センチ近くにまで降ろされた。
「くっ、こ、今度はなによ！　あ……」
潤んだ瞳で悪徳マジシャンを睨みつけながら言い放った途端、不意に両脚が「M」字型に大きく広げられる。
さらに軽く身体を仰け反らされ、股間を客席に見せつける姿勢にされてしまった。手の打ちようがなく、ただされるがままのバニーガール探偵を、さらなる非常事態が襲う。
「では、そろそろご開帳を……」
「ええっ！　なっ、なに……」
マリアの傍らに立ったシャドー神山が、彼女の下腹部近くで怪しい手つきで手招きをすると、まるで操られるように股間を締めつける縄がモゾモゾと動きだす。
（え⁉　どっ、どうして動くのよ⁉　ここには、ピアノ線が仕込まれていないのに……）
またしても起きる信じがたい事態に戸惑うマリアの目の前で、バニースーツの股布が上から押さえつける縄もろともズルリと脇へずれた。
「こっ、これ以上、見せてたまるもんかぁっ！」

黄金色の柔らかな芝に薄く隠された、紅色の割れ目が縦一文字に走る乙女の丘を剥き出されたマリアは、ピアノ線を引き千切って股を閉じようと張りのある太腿を懸命に捩る。

しかし、彼女を吊るす金属線は細いながらも丈夫でビクともしない。

「いいぞ、いいぞおぉ～」

「もっと踊れ踊れえっ！」

身体を隠せないばかりか、恥辱で朱に染まった柔らかな肉体が揺れる姿が、厭らしい肉欲を滾らせた男たちを悦ばせるばかり。

（ほかの女の子たちにもこんなことを……許さない！）

恥ずかしさと怒りに震えるマリアの傍らで、屈強な肉体の男性アシスタントが、今度は雌鶏の入った鳥かごを載せたワゴンを神山のもとへ押してくる。

「さて、次は……」

すると、イケメンマジシャンはタキシードの胸ポケットから取り出したハンカチをかごに被せ素早く引き抜くと、雌鶏は山盛りの卵に姿を変えていた。

「ここに取り出しました産みたて卵、はたしていくつこの美しい肉穴の中に入りますか、さっそく試してみましょう」

鶏卵を一つ取り出し、高く掲げて客席に呼びかけると、神山は殻の尖った側をマリアの股間に押し付けた。

ズリリッ……。

鈍い摩擦音とともに、熱く火照った肉壁が固い卵殻で左右に大きく押し広げられる。

「くぅっ、あんっ、んっ、ひっ、ひぎぃぃぃぃっ！」
女体の最も敏感な部位を引き裂かれるかと思うほどの強烈な痛みが走り、肌もあらわなバニーガールは思わず全身をビクンビクンと痙攣させた。
（こんなの押し込まれたら、裂けちゃう……）
まだ男を知らない無垢な花園が、邪悪な異物で荒らされるという悍ましさと恐怖に、柔らかな頬がヒクヒクと震える。
「おやぁ～、さっきまで威勢がよかったのに、なんだか怯えてるみたいですねぇ～。いい顔してますよ」
心の中を見透かすかのような冷たい視線で見つめながら、美形のサディストマジシャンは、さらに奥まで卵を挿れようと押してきた。
グリリリッ！
（こんなもの、挿れさせ……ない……）
乙女の秘口に侵入する鶏卵は、見た目は普通の卵ではあるがなにか細工してあるらしく、殻が妙に固い。いくら内股に力を込めて割ろうとしても、まるでビクともしなかった。
「どうやら、今回のバニーちゃんは丸ごと飲み込んでくれそうですねぇ」
固い卵を押し込みながら、邪悪な手品師は卑屈な笑みを浮かべて語りかけてくる。
「こっ、こんなもの、入るわけないでしょおっ！」
パキィッ！
ビジュッ！

怒りのあまり、内股にひときわ強烈な力が入ると強固な卵殻がようやく砕け、中から白い粘液が飛び出す。
（なにこの生臭い……まさか！　これって……精液？）
下腹部をベッタリと濡らし、わずかながらも秘割れの中にも染み込んだ白濁液を見て、マリアは背筋が震える。
「おや失敗してしまいましたね。でも、卵はまだまだありますよぉ～」
ヘラヘラと薄ら笑いを浮かべつつ、神山は再びワゴンに手を伸ばして卵を一つ取る。
グチュッ!!　グニグニグニッ……。
「やっ、ぎひいぃぃっっっ！　んっ、くふぅっ、あっ、あうんっ！」
客席に向けて鶏卵を見せびらかしてから、イケメンマジシャンは粘液にまみれた乙女のクレヴァスに押し付ける。
「どっ、どこがマジックだっていうのよ！　天才マジシャンが聞いて呆れるわ、この変態！」
「おやおや、かわいい顔してずいぶん生意気な口を叩きますねぇ～ちょっともったいないですが、ここは一つお仕置きが必要ですね～」
抗う術（すべ）を持たないバニー娘をからかいつつ、神山は右手の指先をくねらせ、手を触れずにスーツの尻布をずらす。
「やあっ！　まっ、またこんな……」
そして、ワゴンからさらに卵をもう一つ取り、夜空に開く大輪の花火を髣髴とさせる放

射状の皺が寄った紅色の菊座にあてがい、左右に捻りながら中へ押し込んだ。
グッ！　グリグリグリュッ!!
「あがひぃぃぃっ！　まっ、前も……後ろも……だっ、だめぇっ！」
排泄では感じたことのない、肛門が引き裂かれそうなぐらいの拡張感に襲われた宙吊りバニーは長い金髪を振り乱して泣き叫ぶ。
「うむ、受精実験もこうしてショーアップされるとなかなか楽しめるものですなぁ」
「しかもそのあと実験台を譲っていただけるとは、まさに至れり尽くせりというか、ねぇ」
ぼやける耳に、客席で楽しげに談笑する男たちの奇妙な会話が響く。
（受精……実験？　まさかこれが……）
大滝が言っていた人間以外のＤＮＡの話を思い出し、粘液まみれの天才科学者は我が身に途方もないことが起きようとしているのを感じ取った。

「おいらとしたことが、こんなとこを見逃していたなんて……」
美貌の爆乳探偵が恥辱のマジックショーに駆り出されていたころ、空也は神山とはじめて顔を合わせた事務所の床下に、監禁部屋を見つけていた。
「この子……行方不明になってたマジックショーのアシスタント、だよな……」
そこにいたのは、ボロボロになったバニー服を着せられ、鎖で繋がれた意識のない一人の娘。身体中にこびり付いた乾いた精液から、強姦されていたのが見て取れる。
「ごめんよ、もっと早く気付いていれば……」

ここへはじめて来たときに隠し扉に気付いていれば、すぐに助けて神山をその場で取り押さえることもできたはず。そう思うと、申し訳なさと悔しさが胸に込み上げてくる。

カチャ、カチャカチャ……。

「くっ、ここを……こうして……っと……」

囚われのバニーを気遣いつつ、空也は手枷の鍵穴を一本の針金でかき回す。

怪奇事件を調査する上で、依頼人の下調べのために、これまで幾度となく警戒厳重な家屋に侵入してきた彼にとって、アナログな手枷を外すのは造作もない、はずだった。

「んんっ！　なんだよこれ……全然手ごたえがな……」

ピキッ！

額に汗して健闘するも虚しく、甲高い金属音とともに針金が折れる。

「チィッ！　電子ロックの金庫すら開けるこのおいらが太刀打ちできないなんて……」

悔しさに顔をしかめると、空也は手にした針金を投げ捨てた。

「マリア先生の力を借りるしかないな。でも今どこにいるんだろ、捜さないと……」

自力ではどうにもならないと悟った潜入調査のプロは、素早く上着を脱いで気絶したままのバニーガールに掛ける。

「すぐに助けを呼んでくるから、待ってて」

頬を撫でて優しく語りかけると、空也は足早に監禁部屋から飛び出していった。

（やっと先生を見つけたと思ったら、どうなってんだ？　なんでこんなところに？）

「さて、勝負もついたことだし……宇佐美マリアといったかな。その美しい身体で試させてもらうとしよう。我々の新たな能力を」

荒い息をついて豊満な乳房を揺らす爆乳バニーに話しかけながら歩み寄ると、ロン毛男は彼女の頭を跨ぎ、華奢な身体には不釣り合いな股間の膨らみを見せつける。

ジ――――――――ッ。

ズジュッ！　ブリュリュリュリュッ！

そしてズボンのファスナーを下ろすと、粘り気のある水音とともに紅色のアナコンダかと思うほど太く長い幾本もの軟体が、勢いよく飛び出してきた。

「こっ、こんなものが人間から生えるなんて、あぁっ！」

ビヂュッ、ビチャッビヂュルッ！

科学では証明できそうもない人体の変化を目の当たりにして、恐怖のあまり青ざめる美貌の科学者の柔らかな肉体に、異形の男根が纏わり付いてきた。

「きゃあっ！」

ツンと尖った桜色の乳首を戴いた柔らかな乳房が剥き出され、四肢が軟体で締め上げられていく。

「はっ、放せ！　離れろおっ！」

必死に手足をバタつかせて振り払おうとしても、容赦なく張りのある太腿や華奢な腕を締めつける火照った触手はビクともしない。

「では、キミたちには新たなスタイルの受精実験のお手本になってもらいましょう」

儚い抵抗も虚しく、異形の怪物に捕らわれた金髪バニーは手足を大の字に広げられ、頭を下にして高々と掲げられてしまう。
まるで周囲を取り囲む、邪な欲望を滾らせたギャラリーに見せつけるかのように。
（いったいどうすれば、こいつら退治できるの……）
「ひぎいいいいいっ！」
必死に反撃の手立てを考える超科学探偵の小さな耳に、悲痛な悲鳴が不意に突き刺さる。
（今の叫び……まさか！）
慌てて声のするほうへ視線を向ければ、美茶を膝に乗せたままの新庄が股間からおびただしい数の触手を伸ばし、彼女のか細い身体に絡み付けていた。
「なっ、なんなの！　なんなのこれ、いやあっ！」
いつもの高飛車で気丈な態度がすっかり消え失せて、漆黒の瞳を潤ませて泣き叫ぶお嬢さま作家の衣服は引き裂かれ、身を隠すものはほとんどない。
グジュッズジュッグジュッ……。
「うくっ、あぅっ、ぬっ、抜いてぇっ！　あぁんっ！」
そして股関節が外れそうなほど広げられた股の間では、高価そうな黒いレースのショーツがずらされて剥き出された肉割れに、極太の一物が捻じ込まれている。
グリップシュッ、ピチュッグジュッ……。
「たっ、助けて、誰かあっ！」
粘液まみれの男根が素早く前後進を繰り返すたびに、繋がった秘肉の隙間から名家の令

嬢は処女の証を撒き散らして喘いだ。
「どっ、道明寺！　あくぅっ！」
ギチュッ！
「ふふふふ、あなたにも差し上げますよ。わたしの子種を」
眼下で初々しい肉体を蹂躙される黒髪の令嬢に気を取られているうちに、引き裂かれんばかりに両足を広げられたマリアの股間を、肉欲の塊が襲う。
グリッグニッグニニニッ！
さらに双曲の谷間へも軟体は滑り込み、固く閉ざされた菊門を抉じ開けてきた。
「ぎひぃっ！　そ、そんなところにまで……かはぁぁっ！」
産道と直腸を同時に貫き暴れる二本の男根が、恥辱で薄紅色に染まる爆乳バニーガールを体内から激しく責めまくる。
ズブッズブブブフッッッ……。
「ひっ、ひぃっ！　あぁぅっ！」
強引に押し広げられた股間の秘園からは、鈍い痛みとともに敏感な肉襞を擦る甘美な刺激が背筋から全身に向けて駆け抜け、
ブピップピフックジュクチュッ……。
焼け火箸を突き込まれたような熱さを感じる肛門は、放屁に似た甲高い音色を奏でる。
「い、いやぁっ！　こんなの聞かないであぐぅっ！」
「少し五月蠅いな。どれ、静かにしてもらおう」

顔から火を吹いて泣き叫ぶ恥ずかしがり屋のバニーガールの口が、激しく脈動する軟体でふさがれた。口腔内に生臭い腐臭を撒き散らして。

ブリュッネブッブチュッグチュッ……。

「ふひんっ、むぐんっ、んっんっんっんっ……」

肉のトンネルを押し広げてピストン運動を繰り返す極太の軟体は徐々にスピードを上げ、豊満バニー娘の体内をかき回す。

（なんなの、この妙な、感じ……）

二つの肉穴の入り口から奥底まで、奇妙なむず痒さがジワジワと広がり、胸の鼓動が天井知らずに高まっていく。

まるで、飲み込まれるのが危険な刺激を、さらに求めるかのように。

（さっさと超音波探査機を作動させていれば、こんなことには……）

「ぐうっっ、キミはなかなかよい穴を持っているな。締めつけといい、中の肉襞の張り付き具合といい、実にいい感触、だ……くっ、も、もう出る……」

遊技場の入り口で油断したことを悔やんでいると、不意にロン毛の触手男が掠れた声で呼びかけてくる。

「んぐはっ！　だっ、だめぇっ！」

いよいよ突きつけられた受精告知にマリアは恐れおののき、長い金髪が乱れるほど頭を激しく左右に振って食道まで入りかけていた触手を引き抜く。

ブビビビビチュルルルル――――ッッッ！

だがその瞬間、肉付きのいいバニーガールに纏わり付いた触手の先端から、一斉に生臭い白濁液が噴き出した。
「は、はひぃぃぃぃっっっっ！」
恥ずかしさで朱に染まった端正な顔が、いつか愛しい人の子を授かるはずの子宮が、そして直腸の奥底が、邪な欲望の証で塗り固められていく。
（あぁ……わたし、またこんな奴の、精子を……）
何一つ抵抗できぬまま、またしても得体の知れない怪奇生物に膣内射精された悔しさと悲しさが胸の中を駆け巡り、マリアは途方に暮れていく。
「ひぃっ！　あ、熱い……お腹が、中が……熱いぃぃぃっ！」
時を同じくして、子宮の中に淫欲のマグマを大量に流し込まれた美茶も、下腹部の内側から滲み出る高熱に最も大切なものを踏みにじられたのを感じ、打ちひしがれていた。
だが、肉体のすべてを汚(けが)された二人の美女の悲劇はまだ終わっていない。邪悪な者たちがさらに迫る。
「ふむ、だんだんわかってきたぞ。身体を変化させるやり方が」
「では、我々も混ぜてもらうとしますか」
ブビュッ！　ビビビュルルッッッ！
（な、なにっ⁉）
周囲で見物していた男たちのズボンが膨らみ、まるでクラッカーのように弾けて、中から太い触手が勢いよく飛び出してくる。それも一人二人ではない。

（あ、あぁ……そんな……）
百人は超えるであろう異形の一物を曝け出した男の群れが、マリアと美茶を取り囲みジリジリと迫ってくる。
（こいつら全員で、わたしと道明寺を……）
無理やり抉じ開けられた秘割れに極太の触手男根を捻じ込まれたままだというのに、さらに数本の触手がビクビクと脈打ちながら、肉の隙間に潜り込もうと迫ってくる。
（あ……だめ……そんなに挿れられたら、わたし……壊れちゃう……裂けちゃう……）
迫り来る醜悪な軟体に抗う術もなく、逆さ宙吊りの爆乳バニーは粘液まみれの肉体を、ただ小刻みに震わせて怯えるばかり。
ピチュッ！
柔らかな金髪に薄く覆われたヴィーナスの丘に、生温かい粘液を纏った先端が触れた。
（もう……だめ……）
ゴウン！　ゴゴゴゴゴ……。
だが、身も心も絶望の海に沈みかけたそのとき、鈍い轟音とともに船体が大きく傾く。
「くうっ！　なっ、なんだなんだ!?」
「操舵室はなにしてるんだっ！」
ドザッ！
突然の事態に新庄とロン毛の痩せ男に取り憑いたエムザヴは慌てふためき、触手を緩めてしまう。

「う……いったいなにが……あ！」
真っ赤なカーペットの上に落とされたマリアは、超音波探査機が落ちているのを見つけた。揺れた弾みに放り出されたらしい。
「塵と化せ！　エムザヴっ！」
カチッ！
素早く探査機を拾い上げて、自著にあったセリフを鋭く言い放つとスイッチを入れる。
「ぎゃぁぁぁぁっっっ！」
「やっ、やめろおおぉぉっ！」
遊技施設の中に人には聞こえない超音波が響き渡り、エムザヴに取り憑かれた男たちは絶叫しながらバタバタと倒れていく。
ブジュッ、ジュルルルル……。
そしてまたもや耳の穴から、薄緑色の粘液が漏れ出した。
「今日こそ逃がさないっ！」
右手で探査機を振り回して超音波を広範囲に広げながら、マリアは左手を胸の谷間に押し込み、中から白い立方体を取り出す。
アニメイベントのときに、宿主から逃げ出した彼らを捕らえるのに使った捕獲キューブの改良型である。
「こいつは、そう簡単に壊せないわよ。覚悟っ！」
「ひいぃぃぃっっっっ！　わっ、わたくし……あんな化け物に……いっ、いやぁぁぁぁ

っ！」
だが、逃げ去る敵めがけて投げつけようとしたそのとき、美茶が大声で泣きじゃくりながら上半身にしがみついてきた。
「もっ、もう生きていけない！　何もかも、おしまいよぉぉおおっ！」
豊満な胸の谷間に顔を押し付けてわめく姿は、まるで怖い目にあって逃げ帰り、母に救いを求める子供のよう。
「ちょっ、道明寺！　離れなさい！」
懸命に身を捩って振り払おうとしても、すっかりパニックに陥ったお嬢さまのしがみつく力は思いのほか強く、まるで離れようとしない。
とうとうキューブを投げるタイミングを逸してしまい、目の前からエムザヴの群れは床を滑って消えていく。
ピリリリリリリ――――！
するとそのとき、爆乳の谷間からけたたましい電子音が鳴り響く。空也との連絡に使っている、通信機の呼び出し音だ。
「空也⁉　今どこにいるの？」
「ああっ、マリア先生！　今操舵室なんすけど、とととっ……ちょっと、いや、すごく大変なことになってて、どわうっ！」
サッと取り出した通信機に呼びかけると、連絡してきたアシスタントは普段から慌て者ではあるが、いつになく混乱している様子。

「え、マ、マリアさん??　どうしてわたくしの下に……あ……」
真下から呼びかけられて、美茶はようやく自分の、身に起きた驚くべき変化に気付き、思わず言葉を失い、漆黒の瞳を大きく見開いて全身を硬直させた。肌もあらわな下着姿で股間に男根を生やし、ライバルの爆乳美女と結合しているのだから無理もない。
「なにしているのよ！　早くしないと、奴らに邪魔されるわ！」
固まってしまった腹上のお嬢さまを引き離そうと、咄嗟にマリアは彼女の細いウェストに手を回し、ゆっくりと押す。
ヌチュッ！　ヌプヌプヌプヌプ……。
「あうっ！　こ、こんな……お腹の中……擦って……んんっ！」
子宮まで貫いていた肉槍が、膣壁を固く張ったエラで擦りながら抜けていく。ようやくヴァギナを押し広げる痛みから抜けられる安堵感とともに。
「あ……い、いや……だめぇっ！」
ところが、あと少しで抜けきるというところまで美茶の身体を押したところで、予想もしなかった事態が起きる。突然美茶はマリアの手を振り払い、なだらかななで肩を掴んで腕立て伏せをするように肘の曲げ伸ばしをはじめた。
「ちょっ！　なにするのよっ！　あっ！」
ブズッ、ズルリュリュリュッ！　グッシャグッシャグッシャ……。
横たわる爆乳バニーに再びのしかかるお嬢さま武闘家は、カチカチにいきり立った男根をヴァギナの中へ押し込んでくる。そして根元まで達すると腰を引く素早い動きで、膣内

をかき回す。その動きは、寄生生物に乗っ取られていたときよりはるかに速く力強い。
「どっ、どうしちゃったのよっ！　あんた、エムザヴの呪縛、んっ、とっ、解けてるんでしょうっ！」
「おかしい、こんなのおかしいですわっ！　だけど……いいっ！　マリアさんの膣内（なか）……すごく熱くて……ヌルヌルして……いいっ！」
いきなり暴れ出す相棒へ顔を真っ赤にして叫ぶと、信じがたい言葉が返ってきた。明らかに美茶は、自らの意思で男根を振り回し、膣内の感触を味わっている。
（エムザヴの意識がなくても、男性器で受ける感触を快楽として感じられるわけ？　どうして……）
さすがの天才科学者にも理解できない状況に、ただ戸惑いを覚えるばかり。だが今は、まず美茶の心を快楽の縁から引き上げるのが先。
「なっ、なに言っているのよおっ！　んっ、そんな醜いもの生やして、くぅっ、大っ嫌いなわたしと……こんなことして、きっ、気持ちいいなんてどうかしてるわっ！」
彼女の意識を正常に戻すべく、マリアは咄嗟に激しい口調で罵ってみる。あえて怒らせることで、いつもの自分に食って掛かるわがままお嬢さまに戻ると思ったのだ。
「ちっ、違う……んっ、そんなこと、ありませんですの……くぅっ……」
ところが、小振りなヒップを振り乱しながら話しかけてくる美茶の口調に怒りは感じられない。どこか甘えているような気さえする。
「違う？　なっ、なにが……違うのよっ！」

「わたくし……んっ、ほっ、本当は……マリアさんのこと、んっ、嫌いじゃない……ですわぁっ！」
（えっ⁉）
普段の噛みつきぶりからは考えられない言葉に、マリアは我が耳を疑う。
「頭がよくて……わたくしより売れっ子で……空也くんに好かれているのが、んっ、羨ましいだけ……そっ、それに……」
戸惑うマリアをよそに、股間に纏わり付く快感のせいで心の箍（たが）が外れたのか、日ごろ何かと突っかかってくるわがままお嬢さまは本音を次々と漏らす。
「それに、くぅっ、あの船のとき……わたくしのこと励ましてくれて……んっ、おっ、お姉さんみたいに、んんっ、頼りになって……」
（あの船？　あ、客船の事件のこと……）
豪華客船で事件が起きたとき、はじめて触手の怪物に犯された上に船が暴走したせいでパニックを起こした美茶を励ましたのは、ほかならぬマリアだった。
（たいしたことしてないのに、わたしをそんな風に想ってくれていたなんて……）
かく言う自分自身は、美茶のことを嫌ってはいるものの、心の底から憎いわけではない。アニメイベントで、自著の宣伝をする予定のコンパニオンが交通事故で来られなくなったのを、身内のことのように心配するほどの優しさを知っているから。
「そんな素敵なあなたが……くんっ、こっ、こんなに気持ちいいなんて……もう、あんっ、我慢できませんわぁっ！」

秘めた想いを口にして歯止めが利かなくなったのか、美茶は漆黒の瞳から大粒の涙をこぼし、ひたすら腰を振り続ける。

「ど、道明寺……」

邪悪な寄生生物に生やされた男根を使っているとはいえ、彼女が膣内を弄ってくるのは、純粋な想いから。それがわかった途端、今までのわだかまりが解け、急に彼女が愛くるしく思えてくる。

グジュッグシュッグジッグシュッ……。

「くうっ、こ、こんなに、強く……わたしの中を……んんっ！」

胎内を弄る一物の感触も、エムザヴにかき回されていたときと違い、優しく撫でられるような心地よさが感じられてきた。股間から身体中を、甘美な刺激が駆け巡る。

（だめ……今は、エムザヴを退治、しないと……）

全身を覆い尽くしつつある快感を振り払おうとしてみても、一度心と身体に点いた愛欲の炎は消し去りようがない。

グリュップシュッグジュッグプジュッジュッ……。

「あ、あぁ……こんなに、かき回してきて……」

意識しないようにすればするほど、逆に股間を出入りする男根がもたらす心地よさが、頭の中がピンクのベールに包まれていく。淫靡な欲望以外のすべてのものから心を遮断するかのように。

「すっ、素敵よ……道明……み、美茶ぁっ！　あんっ、あなたのっ、おっ、オチン……チ

ン、んっ、固くてコリコリして……あっ……もっと突いて、突いてぇっ！」
とうとう堪えきれなくなったマリアは汗ばむ喉を反らし、長い髪を振り乱して喘ぐ。そして大きな桃尻が床から浮くほど腰をはね上げ、自ら膣内に詰まった男根を振り回す。
「うっ、うれしいですわぁっ！　マリアさんが、わたくしのこと、んっ、受け入れて……感じて……くれて……はあんっ！」
彼女の言葉を耳にするやいなや、美茶も腰を振るスピードをさらに上げて、眼下に横たわる爆乳バニーの膣内を貪った。
ブジュッグチャッグチュッチュルッ！
繋がった秘所同士が擦れ合い水気を帯びた淫音が、舞台中に木霊する。大勢の邪な欲望を抱えた男たちに、痴態を晒しているのを忘れさせるほどに。
「まったく、尻の穴をこんなに見せびらかして。もしかして、わたしのを挿れてほしいのかな～」
だが不意に、マリアと美茶は厳しい現実に引き戻される。両足を股関節が外れんばかりに開き、激しく腰を振って繋がった秘肉の擦れる感触を味わう二人の姿を、股の下からカメラで撮っていた司会者がニヤケ顔で話しかけてきた。
「これはもう、ビデオ撮っている場合じゃねぇな～」
大きく見開いた目を爛々と輝かせ、彼は手にしたカメラを放り出す。
ビビビビュルルルッッッ！
その途端に、ヒクヒクと痙攣する肛門をめがけて無数の触手が、ズボンを突き破って飛

び出した。
グリッ！
グニュッグニッグニュリルルッッッッ！
「あひぃっ！　まっ、また……そんなところに挿れるなんてぇっ！」
「お、お尻が……広がってしまいますわぁっ！」
紅色の菊座を引き裂かれんばかりに押し広げられたマリアと美茶は、双曲の谷間から背筋へ駆け抜ける強烈な刺激に火照った肉体を震わせる。
「こんなに締め付けてくれるとはうれしいものだな。お礼にたっぷりと楽しませてやる」
亀頭にかかる圧力に満足しつつ、司会者は長い触手ペニスを素早く前後にスライドさせはじめる。
ズリッズリッズリュッズリュッ……。
「あああっ！　おっ、お尻が……うっ、あっ、熱いですわぁっ！」
「ひぃっ、やっ、焼けるぅっ！」
パンパンに膨らんだ強張りが菊座を擦るたびに、松明（たいまつ）でも突っ込まれたような摩擦熱が下半身一帯に広がっていく。
おまけに、尻穴を突かれるのに引きずられて、美茶の男根がマリアの膣内に押し込まれる勢いが増してきた。擦れ合う秘所から溢れ出る快感が、さらに激しく二人を包み込む。
「ああっ、マっ、マリアさぁんっ！　わたくし、もうっ、我慢……でき、ない……」
「わたしも、もうっ、いっ、イッちゃうっ！　あぁぁぁっっっっ！」

ビジュルルルルッッッッ！　ドクッドクッドクドクッ！
パシャァァァァ――――――――！
ついに堪えきれなくなった二人の美女は、同時に達してしまった。
「あぁ……美、美茶の精液が……わたしの、中に……」
「マリアさんの……あ、温かい、ですわぁ～」
互いに子宮の中に広がるスペルマの熱さと下腹部に放尿された生温かさを感じ取り、満足げに呟く。
「ぐぅぅぅっ、よーしっ。わたしも、だっ、出すぞおっ！」
どびゅっ、ブリュリュリュリュリュ……。
だが、幸せな気分を打ち壊すかのように、司会者がアナルに白濁液を注ぎ込む。
「ひぃっ！　まっ、またお尻が……焼けるっ！」
「やっ、な……なんですのっ、お、お尻の中に……なにを……」
「ちょっと待て。オークションに出ない司会者がヤるってのは、納得いかねぇな～」
すると突然、どこからともなく野太い声で野次が飛ぶ。
（？　こ……今度は……なに？）
声のするほうへ視線を向けると、大柄な中年男が眉間に皺を寄せ、肩を怒らせて席を立つのが見えた。
「俺たちにもやらせろよおっ！」
彼に続いて、見ているだけでは満足できなくなったエムザヴに取り憑かれた男たちが、

先を争ってドカドカと壇上に迫ってくる。
（あ、あぁ……）
ますます増える女に飢えたケダモノの群れに、刃向かう術を持たぬバニーガールは、子ウサギのように身を震わせるしかできない。
「ええいっ、そこをどかんか若造がっ！」
「ち、ちょっとお客さま、うわっ！」
真っ先に重なり合う二人の美女にたどり着いたのは、痩せ細った白髪の老人だった。骨の浮き出た細腕からは想像もつかない怪力で、司会者を押しのける。
ジーッッッッ……。ブビュルルルッッッ！
そしてズボンのファスナーを開き、赤紫色に輝く滑り気を帯びた触手を幾本も伸ばしてきた。
「ひっ！」
饐えた臭いを放ち、大きくうねりながら迫る醜悪な群れを目の当たりにして、マリアは顔を引き攣らせる。
「さぁーて、楽しませてもらうよ、お嬢ちゃ～ん」
しかし、彼は豊満な肉体の金髪バニーには目もくれず、幼顔の華奢なお嬢さまに向かって己が分身の群れを伸ばしてきた。
「きゃあっ！　なっ、なにをしますのっ！」
甲高い悲鳴を上げる美茶のか細い身体に、生臭い粘液を塗り付けながら触手が絡み付く。

その中で際立って太い一本が、黒い若芝を纏った雌穴の中へ潜り込んだ。
グジュッ！　ジュルッグジュッ……。
「はぅっ！　はひぃぃっ！」
「げへへ、ご立派な一物を生やしていても、可愛い雌穴は残っているじゃないか～」
小さな膣口には荷が重すぎる極太の軟体を捻じ込まれ、痛みのあまり華奢な身体を震わせる黒髪のお嬢さまに、触手老人は粘っこく囁きかける。
「み、美茶ぁっ！」
「そんな羨ましそうな顔すんなよ。お前にもちゃーんと、突っ込んでやるからよ」
苦痛に顔を歪める相棒を心配して呼びかけるマリアの頭上から、ドスの利いた野太い声が投げかけられる。いつの間にか顔の脇に、股間から大量の軟体を生やした色黒の小太り男が立っていた。
「い、いつの間に……ひぃっ！」
グリッグリッグリッリリリリッッッッ！
美茶の巨根を打ち込まれてキチキチに広げられた膣口の中へ、固く膨れた触手男根が割り込んでくる。
「きゃあっ！　そ、そんな……さっ、裂ける、裂けちゃうぅっ！」
強張りを二本同時に突き込まれ、引き裂かれんばかりに広がる肉のクレヴァスに、これまで受けたことのない強烈な痛みが弾けた。
「おおー、この感じ。たまんねぇー」

AnotherStory
爆乳バニー
宇佐美マリア
BAD END
漫画 こうきくう
ご案内
この漫画は274ページから分岐するifストーリーです。小説本編をお読みくださいました後ですと、よりお楽しみいただけます。

あ！待ちなさいっ

!! 空也っ危ないっ!!

え!?

バッ

うわっ!!

ドギュ

ズザザッ

空也大丈夫!?

く空也っくん!?

ガクッ

ズルルン

ニャァァ

っ！しまった

くっ 空也あんたエムザヴに取り憑かれてっ

あ……

新種に取り憑かれたのなら超音波(ロザリオ)は効かない

なら発光弾で…っ

発光弾はもう使いきって…っ

なら何とか意識だけでも

きゃあああああ！

美茶っ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!
キルタイムのアダルトコミック誌!
電子書籍も配信中!
業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!
ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE
08
監獄戦艦3
男なのに……
偉人女体化
隔月発売
魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!
UNREAL
06
モグダン
応援感謝の祝9周年
豪華付録つき特大号
隔月発売
大人気PCゲームのコミック多数連載!
ヒロインピンチDX
vol.5
対魔忍アサギ3
高浜太郎
長井わたる
魔法少女プロイセン&ミュー
しーまる
触手に白濁に肉欲に嬲られ
むっちり!!
電子版は毎月配信!
書籍版は偶数月発売!
コミック UNREAL アンリアル
ヒロインピンチDX
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて!
キルタイム
検索
Click
書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。